

Title	古代人と花
Sub Title	The ancients and flowers
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1973
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.45, No.4 (1973. 10) ,p.63(423)- 86(446)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19731000-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代人と花

松本芳夫

人間の生活の発達は、その教養や素質などによることは、いうまでもないが、またその環境による影響の大きなことも看過できない。それも社会環境と自然環境との別があつて、相互に作用しあうけれども、古代においては、後者の影響が甚だ大きかつた。

わが国は、海島であつて比較的平和であり、気候が温暖で、四季の変化があり、土地が肥沃であつたから、人間の生活には、まことに適したところであつた。従つてわが古代人は、このおだやかな自然のうちに育くまれながら、その変化を味うことができた。ことに気温の変化などは、敏感にとらえたようで、ここに春夏秋冬の季節感を得た。

文学にあらわれた四季の観念は、中国の思想によつてつよめられたことがあつたにしても、農業を主要生業とした

わが古代人は、生活そのものによつて、おのずからにそれを感じたのである。農業は、土地の肥瘦とともに、気候の変化の影響が甚だ大きいから、必然に季節に注意せざるをえない。古代の物語において、秋山之下氷壯夫と春山之霞壯士という名称のうまれたごときも(古事記中巻 応神天皇の巻)そのためと言つてよい。

万葉集の巻八と巻十とは、春夏秋冬の四季に分けて、それぞれの歌をおさめてあるから、その季節感を知ることができるが、その他の巻においても、たとえば、『春べは、花折りかざし、秋立てば、黄葉かざし』とか(巻二)、或は『とこしへに夏冬行けや皮衣』などの(巻九)歌句があり、或は春霞、春雨、春山、春野、春草、夏野、夏草、夏虫、秋風、秋田、秋山、秋萩、冬木などのような、季節をしめす語がみられるのである。

そうして季節感は、その季節の特殊な気象や、鳥獸や、

草木などの自然の変化、またそれにもなつて営まれる生業や、風俗、行事などによつても、知ることができ、ことにわれわれの視覚による美意識を刺戟するものは、四季に咲きほこる草木の花である。

うちなびく 春さり来らし 山のまの

遠き木ぬれの 咲きぬる見れば。

のように（万葉集卷十春雑歌）、山の木の花の咲くのをみて、春の来たのを感じるのである。

古代人が、いかなる花を、いかに観賞したかをみる前に、まず花一般に対する古代人の感懐をみたい。

二

古代人が花に注意していたことは、神代に花の名をおびた神の存在していることによつて、知ることができる。たとえば、オオヤマツミノ神の女に、コノハナチルヒメがあり、またスサノヲノ命の神裔に、フカフチノミズヤレハナノ神があり、この二神は、ただハナという名称をおびるだけであつて、花についての物語を有しないが、この点にお

いて甚だ興のあるのは、コノハナノサクヤヒメの物語である。

天孫ニギノミコトが、オオヤマツミノ神のすすめた姉妹のうち、姉のイワナガヒメが醜女であるので、これをしりぞけ、美女の妹コノハナノサクヤヒメのみを迎え入れたので、オオヤマツミノ神は、姉妹二人をすすめたのは、天孫の寿命がいつまでも磐のごとく不動であり、また木の花のように美しく栄えんがためであつたのに、イワナガヒメを返してコノハナノサクヤヒメだけをとどめたのでは、天孫の御子の寿命は木の花のごとく、短命であろうと言われたという。これは、花のうるわしさと、そのはかなさをもつて、人命の短いことを示したものである。

花が散り、うつりかわることと、人命のはかなさを関聯してうたった歌は、万葉集にみられる。たとえば、安積皇子の死に対する大伴家持の挽歌に

足引の 山さへ光り 咲く花の 散にしごとき わが
大君かも。

がある（卷三）。山もてりかがやくまでに咲く花のように

榮えたのに、その花の散ったように、はかなく死なれたことを、悲しまれたのである。また

世のなかには 数なきものか 春花の 散りのまがひに
死ぬべき思へば。

がある（巻十七）。これもおなじ作者が病床に伏した時の感懐で、花の散りうせるごとく、はかなく死亡することを思えば、世の人の齡の短いことよと、いうのであろう。また同じ作者の歌に

咲く花は うつろう時あり 足引の 山菅すげの根し 長
くはありけり。

とか（巻二十）、或は

八千くさの 花はうつろう 常磐なる 松の小枝を
我はむすばな。

がある。（同上）。根の長い菅と、常緑の松を賞しつつ、うつろいやすい花の命をなげいたものであろう。

言問はぬ 木すら春咲き 秋づけば黄葉散らくは 常
を無みこそ。

というのは（巻十九）、万象のうつり変り、つねなきことを

なげいたのであり、また『……………咲く花も 時にうつろふ現身うつしみも 常なくありけり ……………』というのも（同上）、おなじ思想である。

以上は、花の散りうせることから、人の世のはかなさを聯想して、かなしみ、なげいたものであるが、そういう感慨とはちがったものもある。

少女らが 玉裳裾曳く この庭に 秋風吹きて 花は
散りつつ。

とか（巻二十安宿王）、或は

秋風の 吹きこき敷ける 花の庭 清き月夜に 見れ
ど飽かぬかも。

とか（同上、大伴家持）、或は

樹花帯^レ風散 柏葉含^レ月新。

などは（懷風藻、守部連大隅）、落花の風情そのものを、美しいとみたのである。また

初花の 散るべきものを 人言の しげきによりて
淀むころかも。

のごときも（万葉集巻四、佐伯赤麻呂）、かわった趣きのもの

で、美しい初花を、人言のしげきをはばかって、手折りもできず、思いなやんでいゝるのであつて、これはおそろく、思う女を、よその人にとられはしないかと、案じている心境であらう。

花が散り、うつろふことを詠じた歌は甚だ多いが、それとは全くちがつたものに

咲く花の 色はかはらず ももしきの

大宮人ぞ たち変りぬる。

というのがあつた(卷六雑歌)。これは、三香原の都の荒れはてたのを悲んで詠んだものであつて、春になつて、昔のままに花は色うつくしく咲くのに、都の人が他処に移住してしまつて、見る人もないことを、嘆いたのであらう。これと似た感懐を詠じたもので

庭樹不知人去尽。春来還發旧時花。

がある(唐詩選、山房春事)。花は年々同じであるのに、それを見る人が変るといふのであつて、国を異にしても、おなじ詩情がみられるのであり、そうしてそれは、『年年歳歳

花相似。歳歳年年人不同。』といふのと(同上、代悲白頭翁と、関聯するのであつて、花と人生とを対比して、人の世のうつりかわりを、思いわびたものである。

古代人が花をめだしたのは、もちろんその色のうるわしさのためではあるが、単にそれだけではなく、また花が馥郁たる香氣をはなつたためであつた。たとえば、『……花のみ 匂ひてあれば 見るごとに まして思ほゆ……』とか(万葉集卷八)、『春の花 今はさかりに 匂ふらむ』とか(卷十七)、『春花の にはえ榮えて』とか(卷十九)、『春の始は やすくさに花咲き匂ひ』とか(卷二十)、或は『含香花笑叢』などのように(懷風藻、釈智感)、匂ひについての歌句、詩句があるが、ことに

青丹によし 奈良の都は 咲く花の 匂ふがごとく
いま盛りなり。

といふのは(万葉集卷三、小野老)、奈良の都の盛大を、花のさかりの美しさをもつてたたえたのであつて、これは上述したような、花と人生との対比ではなく、むしろ両者のさ

わやかな融和とみてよい。

すめるぎの 御代栄えむと 東なる 陸奥山に 黄金
花咲く。

というのは（巻十八、大伴家持）、聖武天皇が大仏を鑄造し
けれども、塗金の不足で困っていたところ、陸奥国の小田
郡から産した黄金の献上があつて、それによって大仏が完
成したことをいうのであつて、これもまた奈良の盛時をう
たったものである。

色うるわしく、匂かぐわしい花は、おのずから美女をお
もわせるのであつて、

見渡せば 向つ尾上の花匂ひ 照りて立てるは はし
き誰が妻。

は（巻二十、大伴家持）、江南の美女を見て作れる歌と、作
者は記してある。従つてまた花は、人生の最もつややかな
恋愛に通じるのであつて、

玉葛 花のみ咲きて ならざるは 誰が恋ならめ
わは恋ひもふを

古代 人と花

というのは（巻二、相聞、巨勢郎女）、花のみ咲いて実のなら
ぬような、あさはかな恋は、誰の恋か、われは心底から恋
い思ふものをというのであろう。

冬籠り 春咲く花を 手折りもち ちたびのかぎり
恋ひわたるかも。

というのは（巻十、春相聞）、いついつまでも恋しく思ふ情
をのべたものであり、

さぬかたは 実にならずとも 花のみも
咲きて見えこそ 恋の慰さに。

というのは（同）、たとえ恋が実をむすばなくても、せめて
のなぐさめに、花だけでも咲いてくれという恋情をのべた
ものであろう。

咲く花は 過ぐる時あれど わが恋ふる
心のうちは 止む時もなし。

というのは（巻十一、寄物陳思）、花は咲いてやがて散りうせ
る時があるけれども、わが恋心は、うつろう時はさらにな
いというのであろう。

以上の外にも、花をもって恋愛をうたったものはある

（四二七）

六七

が、花をもって肉親に対する愛情をのべたものもある。

時々の 花は咲けども 何すれぞ 母とふ花の 咲きて来すけむ。

というのは(巻二十)、防人として筑紫につかわされた作者が、旅中野山をゆくと、時々には花は咲くけれども、どうして母という花が咲いてこないのか、すなわち花のような愛しき母に会えないのかというのであって、これに似た感情をうたったものに、

本ごとに 花は咲けども 何とかも うつくし妹が
また咲きて来ぬ。

というのがある(孝徳紀大化五年三月)。また

父母も 花にもがもや 草枕 旅はゆくとも
ささげてゆかん。

というのがある(万葉集巻二十)。これも防人の歌で、父母が花にてもあれかし、そうすれば旅をしても、いずこまでもささげてゆくものを、というのであって、花をもって父母に対する愛情をのべたものである。

なお面白い歌に、乞食の詠歌があつて(巻十六)、待ち伏

せしているところえ、ねらっている鹿がやってきて言うには、殺してくれれば、私の身体全部を大君にささげられるので、そうすれば『……老い果てぬ わが身一つに 七重花咲く 八重花咲くと 申しはやさね 申しはやさね』というのである。これは、すべてのものを大君にささげ、それによって祝福を期する古代人の感慨とか、或はいろいろの経験をなめてきた老人が、人生の最後にのぞんで祝福をこいねがう心情を、鹿を借りてのべているかのような思いをさせる歌である。

かくのごとき、花と人生とのうるわしい関係は、また花と神との関係においても見られる。イザナミノミコトが火神を生んだ時、火にやかれて死なれたので、紀伊国の熊野の有馬村に葬られたが、土俗は、この神の魂を祭るには、花の時には花をもってまつり、また鼓、笛、旗などをもつて歌舞してまつるといふ(神代紀、四神出生の章、第五の一書)。これは花のうるわしさと、かぐわしい香氣とによって、死者の霊をきよめ、しずめ、やわらげるためであろう。

また三枝祭さいくまというのがある。これは率川神社の祭であつて、三枝の花をもって酒樽を飾ってまつるのであるといふ。サイクサはサキクサの音便で、幸草すなわち吉兆の草の意で、山百合であろうと思ふ。

また鎮花祭、はなしずめのまつりというのがある。これは春花の季節には、疫神が分散して疫病が流行するので、それを鎮めるために、疫神を祭るのであるといふ。花の季節に悪病が流行するといふのは、花のうるわしさと矛盾するもののように思われもするが、しかし花そのものが悪神であるのではないから、これも花のうるわしさをもつて、悪神のみたまをやわらげ、しずめるための祭と解されるであらう。

その他にも、花祭とか、花盛祭はなもりを行う社があるが、神と花との関係は単に、社ばかりではない。

梅の花　しだり柳に　折り雑まじへ、花かみにたむけば

君に逢はむかも。

といふのは(万葉集卷十、春相聞)、梅の花と枝垂柳とを折り雑せて神に供えたならば、君に逢うことができるであらう

と云うのであつて、花をもって神に祈願した例である。神に供えたのは、常緑の榊だけではなかつた。

かくのごとく、花は人と神とに親まれ、愛されたから、春の季節には、人々はこころ浮きたち、たのしく遊んだのであつて、常陸風土記筑波郡の条には、『坂より東の諸国の男女。春は花の開ける時、秋は葉のもみづる節、いざなひ、つらなり、飲食をしものもたらし、よぢのぼり遊楽あそびすめり』とあり、おそらく歌垣などが催されたであらう。また同記茨城郡の条にも、花の時、紅葉の折に、人民がたのしく遊楽したことが、しるされてある。

しかし花の季節のたのしみは、単に庶民だけのものではなかつた。嵯峨天皇は、弘仁三年(八一二)二月十二日、神泉苑にいであつて花樹を見られ、文人に命じて詩作させたが、花宴の節は、これから始まつたと言われ(日本後紀卷二二)、その後も花宴は催されたようであるが、こういう朝廷の行事以外にも、たとえば、天平二年正月十二日、大伴旅人の宅に三十人あまりの人々が集まつて宴会し、梅の花

の歌を詠じたように（万葉集巻五）、貴族たちの親しいものが集まって飲食し、花を見て楽しんだのである。

三

つぎに古代人は、いかなる花をいかに観賞したかを検したい。しかしその数が甚だ多く、万葉集だけでも五十以上を算し、そのうちには、冬と春、春と夏というように、二季にまたがるものがあり、或はいまなお確証しがたいものもあり、また風土記などには、花とことわっていないけれども、花の咲く野草や樹木が多数記されていて、いちいち挙げることはできないから、春夏秋冬のそれぞれの季の代表となる花を一つずつ選んで、それについて述べよう。

春の花の代表は、桜である。履中天皇が池に舟をうかべて遊宴された時、酒の盃に桜の花が落ち入ったので、天皇はあやしまれ、これは時じくの花であるが、いずこの花かと言つて、臣下をして尋ねさせ、掖上わきのかみの室山で桜を得てたてまつつたので、天皇はそのめずらしさを喜ばれて宮の名

となし、磐余いわれの稚桜宮というのは、この縁であるという（履中紀三年十一月）。この話の桜は、返り咲きの花であつたので、天皇はことさらによろこばれたのであろうが、しかし桜は春の花として最もふさわしいと言つてよい。

稚桜宮は、神功紀六十九年四月の条にもあるけれども、その名称のいわれは明かでなく、また履中紀の話は、文献にみえる桜として最初のものであるけれども、古代人は、このうるわしい、陽気な桜の花を、古くから愛していたのである。

古代人が、単に花と言っているものの中には、桜が多ふくまれていたのであつて、たとえば、奈良の都の盛りをたたえた『咲く花の 匂ふがごとくいまさかりなり』という花は、おそらく桜であろう。また『……天の下 知しまさむと 八百万 千歳を兼ねて 定めけむ 奈良の都は 陽炎かきつひの 春にしなれば 春日山 三笠の野辺に 桜花木のくれがくり ……』というのは（万葉集巻六雑歌）、下句に『…… 新代の 事にしあれば 大君の ひきのまにまに 春花の 移ひ変り ……』とあるように、実は

奈良の都の荒廢をうたったものであるけれども、昔の盛りをしのぶにはおのずから桜を思いうかべざるをえなかったのである。都のにぎやかさ、うるわしさを示す花として、桜以外にふさわしいものはないであろう。

桜花 いまさかりなり 難波の海 押し照る宮に
聞き召すなべ。

というのは(卷二十大伴家持)、大君のいます難波の宮は、いま二月であるので、桜の花もさかりであって、貴く、めでたくあるというのであろう。

をとめらが かざしのために雅男が みやびを かずらのために
しきませる 国のはたてに 咲きにける 桜花の 匂
ひはもあなに。

というのは(卷八、春雑歌、若宮年魚麻呂)、国中に咲きほこる桜のうるわしさを、ほめたたえたのである。

見渡せば 春日の野辺に 霞立ち 咲き匂へるは
桜花かも。

というのも(卷十、春雑歌)、花ざかりの桜をながめて詠んだものである。

しかし古代人は、ものの美をみる時、形態や色彩の異つたものを対比することがある。たとえば、懐風藻の詩句の『葉緑園柳月 花紅山桜春』とか(委女朝臣比良夫)、『松烟雙吐^{テキ}翠 桜柳分含^テ新』などは(長屋王)、緑の葉の柳と、紅の花の桜とを対比したのであって、これによって両者ともその美が一層つよく感ぜられる。

かくのごとく、美しさをめでられた桜の花は、おのずから恋愛にもちいられる。允恭天皇は、皇后の妹の美女である弟姫、すなわち衣通^{そとほり}郎姫を愛し、姫を訪れて、翌朝井のそばの桜の花をみて

花麗^はし 桜の愛^め 特愛^{ことめ}は 早くは愛^めです
わが愛づる子を。

と詠じたが(允恭紀八年春二月)、これは、花のうるわしい桜のように、特に愛するのであったのなら、もっと早く愛すればよかったのにというのであって、これを聞いた皇后は、ひどく恨んだという。

去年^{こぞ}の春 逢へりし君に 恋ひにてし 桜の花は
迎へくらしも。

というのは(万葉集卷八、春雑歌、若宮年魚麻呂)、去年の花見の折逢って恋しく思っていた君と、今また桜の花の下で逢うことのできたのは、桜の花が君を迎えたのであって、うれしいというのであろう。

この花の ひとよのうちに 百種ももくさの 言ぞこもれる
おほろかにすな。

というのは(卷八、春相聞)、藤原広嗣が、桜の花を乙女に贈った時の歌であって、君におくる桜の花の一ひらのうちに、君に言いたい、いろいろのことがこもってあるから、おろそかにするなというのであり、これに対して、乙女は

この花の ひとよのうちに ももくさの
言もちかねて 折られけらずや。

と答えたが、花の一ひらのうちに籠っている言の重さにたえかねて、折られたのではありませんか、というのである。

春さらば かざしにせむと わが思ひし

桜の花は ちりゆけるかも。

妹が名に 懸かかせる桜 花さかば つねにや恋ひむ

いや年のはに。

という二首は(卷十六)、桜児という娘を恋う二人の青年が、死をもって争い、これを知った娘はついに自殺したので、二人の青年が恋慕の情をのべたものである。

たゆらきの 山の峰をの上への 桜花 咲かむ春辺は 君
をしぬばむ。(卷九、相聞、石川大夫)

山峽かに 咲ける桜は ただ一目 君に見せてば 何を
か思はむ。(卷十七)

あしびきの 山さくら花 ひと目だに 君とし見ては
吾恋ひめやも。(卷十七、大伴家持)

桜花 今ぞさかりと 人は云へど 我はさぶしも 君
としあらねば。(卷十八、大伴池主)

は、いずれも、桜の花から愛人をしてのんだ歌である。

桜の花の散ることを詠んだ歌には、

宿にある 桜の花は いまもかも 松風痛み 散れる
頃かも。

世の中も 常にしあらねば 宿にある 桜の花の
散れるころかも。

のごときがある（巻八、春相聞）。これは厚見王と久米女郎との贈答歌であって、人の世の常ならぬことと、桜の散ることとをからませて、花の散ることを惜んだものである。

桜花 咲きかも散ると 見るまでに 誰かもここに
見えてちりゆく。

というのは（巻十二、羈旅発思）、桜の散ることく、うるわしく相見しほどもなく、離れ去るを悲んだものであろう。

あしびきの 山間照らす 桜花 この春雨に 散りゆ
かむかも。

春雨は いたくな降りそ 桜花 いまだ見なくに 散
らまく惜しも。

は（巻十、春雑歌）、春雨に花の散るのを惜んだものである。

あしびきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば い
たも恋ひめやも。

というのは（巻八、春雑歌、山部赤人）、山桜の花が幾日も長くつづいて、かのように咲いてあるのなら、それほど恋ひ

しく思うだろうか、さかりとおもえば、はやうつろい散るが故に、恋しく思うのだ、というのであって、花のいのちの短いのを、却っていいというのは、おもしろい詩情である。

これとやや似たものに

桜花 時は過ぎねど みる人の 恋のさかりと 今し
散るらむ。

というのが（巻十、春雑歌）。桜の花のさかりの時が過ぎたのではないが、人のめざる盛りをすごしたならば、人に惜しまれることはないので、今は人にめでられるさかりであるので、かく散るのであろうというのである。単純に散ることを惜しむのではなく、桜の心になって、散ることをめでたのである。

かくのごとく、古代人は古くから桜の花を愛し、そのさかりをたたえ、散ることを惜しみつつ、花と人生とをからませてうたったのである。この点からみると、二節でのべた花の多くは、桜の花を指すようにおもわれる。

四

夏の花の代表としては、橘をあげたい。垂仁天皇が、田道間守を常世国につかわして、非時香菓をもとめしめたが、これが橘であるといひ（垂仁紀九十年）、応神天皇の御製に、『……わが行く道の かぐはし花橘は 上枝は鳥居枯し 下枝は 人取り枯し ……』とあり（古事記、中巻）、皇極紀三年七月の条に、東国で、常世の神という虫を祭ると、富と寿とを得ると言つて人民をあざむいたものがあつたが、その虫は橘に生じたとあり、また『橘は おのが枝々 実れども 玉に貫くとき 同じ緒に貫く』という童謡があり（天智紀十年正月）、或は橘の小戸という地名や（神代紀）、橘姫（雄略紀元年三月）とか、橘王（顕宗即位前紀）などの人名があるから、橘が外来樹であつたにしても、古くから知られていたらしい。この橘が、いかなる木であつたかについては、種々の見解があるが、柑子こらしであろうといわれている。

しかるに、続日本紀（九、神亀二年十一月）、によると、播

磨直弟兄が、初めて柑子をもつて唐国から来り、佐味朝臣忠麻呂が、その種を殖えて実を結んだので、二人が恩賞にあづかつたという。もし、そうであるのならば、これと、それ以前の橘とは、別種のように思われるが、しかし柑橘類には種類が多いから、いずれにしろ、そのうちの一種とみて、いいのではなからうか。

橘は 実さへ花さへ その葉さへ 枝に霜降れど
いや常葉の樹。

という、聖武天皇の御製や（万葉集、卷六、雑歌）、また

……春されば……
初花を 枝に手折りて 少女らに 衷にも遺りみ ……
…… 秋づけば …… 紅に 匂ひ散れども 橘の
なれる其実は 直照りに いや見が欲しく ……
冬にいたれば 霜置けど その葉も枯れず 常磐なす
いや榮ばえに。然れこそ 神の御代より 宜しなへ
この橘を 時じくの 香の木の実と 名づけけらしも。
という、大伴家持の長歌（卷十八）にみられるように、かぐわしい白い花と、黄色にかがやく実と、緑色の葉の三要素

によつて、橘が人々に観賞されたのである。従つて万葉集には、橘の歌は甚だ多いが、花そのものを賞したものは、比較的すくない。

いかといかと ある我が宿に 百枝差し生ふる橘 玉に貫く 五月を近み あえぬがに 花咲きにけり。

朝にけに 出で見るごとに 息の緒に わが思ふ妹に 真寸鏡 清き月夜に 唯一目 見せむまでには 散り

こすな ゆめと言ひつつ ここたくも 我が守るものを うれたきや 醜郭公 暁の うら悲しきに 追へ

ど 追へど 尚し来鳴きて いたづらに 地に散らせ ば 術をなみ 攀ちて手折りつ 見ませ我妹子。

は(巻八、夏相聞、大伴家持)、橘の花に対する愛好を示したものである。

わが宿の 花橘を 郭公 来鳴きとよめて 本に散らしつ。

も(同上、大伴村上)、郭公のために、花を散らされたことを、うらんだものである。

橘の 花散る里の 郭公 片恋しつ 鳴く日しぞ多

き。

というのは(巻八、夏雑歌)、太宰帥大伴旅人が亡き妻をしのんだ歌であつて、橘は亡妻、郭公は旅人自らをたとえたものであるが、橘によせて、人をしのお歌は、外にもある。

風に散る 花橘を 袖に受けて 君が御為と 思ひつるかも。(巻十、夏雑歌)。

郭公 来鳴きとよもす 橘の 花散る庭を 見む人は 誰。(同上)

わが宿の 花橘は 散りにけり 悔しき時に 逢へる 君かも。(同上)

我こそは 憎くもあらめ わが宿の 花橘を 見には 来じとや。(同上、夏相聞)

などは、そうであるが、ことに 橘の 花散る里に 通ひなば 山郭公 とよもさむかも。

は(同上)、女のところ、しげしげでかけて行ったならば、郭公がやかましく鳴き立てるように、人の評判になる

であろうというのであり、また

小里せさとなる 花橋を 引きよぢて 折らむとすれど う
ら若みかも。

というのは(巻十四、東歌、譬喩歌)、恋した女があまりに年
若いので、手折ることもできないで、躊躇している心情で
ある。

ほととぎす 来鳴く五月さつきに 咲き匂ふ 花橋の かぐ

はしき 歌の御言みこと 朝宵に 聞かぬ日まぬく ……

は(巻十九、大伴家持)、恋愛ではないが、なつかしい肉親に
対する情愛をのべたものである。

橘は 花にも実にも 見つれども いや時じくに

猶し見が欲し。

は(巻十八、大伴家持)春には花を、秋には実を見るけれど
も、時をかぎらないで、いついつまでも見たい、というの
であるが、しかし橘については、花のみならず、むしろ、
その実をうたった歌が多く、そうしてそのうちには、目出
度いことに、もちいられたものがある。

常世物 その橘の いや照りに わが大君は

今も見るごと。

大君は 常磐に座まさむ 橘の 殿の橘
ひた照りにして。

は(同上)、橘の実の照りかがやくように、大君は、今み
るごとく、またいついつまでも、栄え、かがやくであろう
というのである。

五

秋の花として人々に最も愛される菊は、万葉集にはな
く、懐風藻にはじめて見えるのであって、中国からの渡来
が延暦年間と言われたりするが、そのためか、まだ庶民に
親しまれるまでにいたらなかったようである。山上憶良
が、秋の花として、

萩の花 尾花葛花 撫子の花 女郎花

また藤袴 朝顔の花。

の七種をあげたが(万葉集巻八、秋雑歌)、萩をまっさきに挙
げていることから、わかるように、秋の花の代表は、萩
であると言つてよい。万葉集において詠まれた花のうち、

萩が最も多く、百三十七首もあるから、如何に人々に愛されたかを知ることが出来る。ちなみに、右の歌の朝顔については諸説があるが、桔梗であろうと言われている。

秋田苺る 仮庵かりほの宿やどり 匂ふまで 咲ける 秋萩
見れど飽かぬかも。

は（巻十、秋雑歌）、単純な歌ではあるが、萩の花のさかりに咲いている田舎の光景が、しのばれる。また

秋津野の 尾花刈り添へ 秋萩の 花を葺かさね
君が仮廬かりほに。

の如きも（巻十、秋相聞）、仮小屋の屋根に、尾花を刈りそえて、萩の花を葺くなどは、田舎における、しゃれた趣向である。

秋の野に 咲ける秋萩 秋風に なびける上に
秋の露置けり。

は（巻八、秋雑歌、大伴家持）、秋という語をくりかえし用いた特殊な表現であるが、萩の花に露をそえた歌が多く詠まれている。実景ではあるが、可憐な花であるので、それの添えものとして露がふさわしいのであろう。

朝戸開けて 物思ふ時に 白露の 置ける秋萩
見えつつもとな。

は（同上、文馬養）、朝戸を開けて物を思う時、白露の置ける萩がおのずから目に映じ、わけもなく物思いをさせるというのであろう。

秋萩の 上に白露 置くごとに 見つつぞしのぶ
君が姿を。

は（巻十、秋相聞）、萩の上に置ける白露をみると、その美しさに、君の姿を思いだすというのであって、恋にからませた萩の歌も多い。

我妹子わがもこに 恋ひつつあらずば 秋萩の
咲きて散りぬる 花ならましを。

は（巻二、相聞、弓削皇子）、こんなに恋しく思うよりは、一層のこと、咲いて散ってしまう萩の花であったなら、よかるうに、というのであろう。

萩の花 咲きのををりを 見よとかも 月夜の清き
恋増さらくに。

は（巻十、秋雑歌）、さかりに咲いている萩の花を、夜も見

よというので、月が清く照らしているのであろうか。そのために、いよいよ恋がはげしくなるよ、というのであるう。

何すとか 君を厭はむ 秋萩の その初花の
うれしきものを。

は(巻十、秋相聞)、どうしてあなたを嫌いましうや、萩の初花を見るように、あなたに会うのは、うれしいのです、というのである。

宇陀の野の 秋萩しぬぎ 鳴く鹿も 妻を恋ふらく
我には増さじ。

というのは(巻八、秋相聞)、萩をおしわけて、妻恋しく鳴く鹿も、妻を恋しく思うことにかけては、我にまさることはないというのである。そうして萩と鹿とを結びつけた歌は、少くない。

わが岡に さ牡鹿来鳴く さき萩の 花妻問ひに
来鳴くさ牡鹿。

というのは(巻八、秋雑歌、大伴旅人)、さき萩、すなわち萩の初花をめでて、牡鹿が妻問ひに来て鳴くというのである

う。

秋萩の 散りのまがひに 呼びたてて 鳴くなる鹿の
声のはるけさ。

というのは(同上、湯原王)、萩の花の散りみだれるのにまぎれて、妻を見失って鳴く鹿の声が、はるかに聞えるというのであるう。

萩については、いろいろの歌があるが、あまり長くなるので、

秋風は 涼しくなりぬ。馬並めて いざ野に行かな
萩の花見に。

をもって(巻十、秋雑歌)、終りにしよう。

六

梅は、万葉集では、春と冬の二季の花とされてあるが、冬の花がいたって少ないので、ここでは梅の花をもって、冬の代表とした。

梅は、古くからわが国にあったのではなく、中国から渡来したものらしい。従って紀記には梅の記事はなく、懐風

藻や万葉集において、はじめてあらわれるのである。

聖武天皇は、天平十年（七三八）三月、西池宮にいりて、
して殿前の梅樹を指し、じぶんは去年の春からこの樹が好
きであるけれども、まだ十分めで、たのしんでいない、花
葉はすでに落ちて甚だ惜しいが、おのおの春のころをの
べて、この梅樹をうたえと仰せられ、文人三十人が詔をう
けて詠じたというが（続紀十三）、おそらく奈良時代ごろか
ら、この花がめでられたのであって、万葉集にみられる花
としては、萩の花について、その数がきわめて多いけれど
も、しかしそれは多く貴族文人の風雅のためにもちいられ
て、一般庶民の愛する花にまでなっていないかったようであ
る。

梅は外来樹であったから、野生のものはすくなく、まれ
には、『わが岡に盛りに咲ける梅の花』とか（万葉集巻八）、
『梅の花 咲ける岡辺に 家居れば』などのように（巻十）、
園外のものもあるけれども、多くは、『妹が家に 咲きた
る梅』とか（巻三）、『わが苑に 梅の花散る』とか（巻五）、
『わが宿に さかりに咲ける 梅の花』とか（同上）、『梅の

花 咲き散る苑に』などのように（巻十）、庭に植えられた
ものであった。

梅は冬から早春に咲くので、その季節のものと、かかわ
りをもってみられた歌が多い。

残りたる 雪にまじれる 梅の花 早くな散りそ

雪は消ぬとも。

雪の色を 奪ひて咲ける 梅の花 今盛りなり

見む人もかも。

とか（巻五、雑歌、大伴旅人）、

今日降りし 雪にきそひて わが宿の 冬木の梅は

花咲きにけり。

などは（巻八、冬雑歌、大伴家持）、雪との関係をうたったも

のであり、懐風藻にも、『芳梅含雪散』とか（百済公和麻呂）、

『梅花雪猶寒』（塩屋連古麻呂）とか、『送雪梅花笑』（境部主

などの詩句がある。また

春の野に 鳴くや鶯 なつけむと わが家の園に

梅が花咲く。

とか（巻五、雑歌、志氏大道）、

鶯の 音聞くなへに 梅の花 我家の園に
咲きて散る見ゆ。

などは(同上、高氏老)、鶯を配したものであり、また懷風藻にも、『素梅開ニ素鬢ニ嬌鶯弄ニ嬌声ニ』(中臣大島)という詩句があり、また『求レ友鶯嬌^{ウラヒ}樹^ニ 含^レ香花笑^ム叢^ニ』(紀智蔵)という花は、梅花を指したものである。また

春雨に 萌えし柳と 梅の花 ともにおくれぬ
常のものかも。

遊ぶ内の 楽しき庭に 梅柳 折りかざしてば
思ひ無みかも。

の二首は、(卷十七、大伴家持)、柳と対比したものであって、懷風藻の詩句にも、『芳梅含^レ雪散。嫩柳帯^レ風斜』とか(射長王)、『柳条風未^レ煖。梅花雪猶寒』(塩屋連古麻呂)などの詩句があり、ことに『庭梅已含^レ笑 門柳未^レ成^レ眉』(大津連首)の詩句と、

梅の花 とり持ち見れば 我が宿の 柳の眉し
思ほゆるかも。

の歌は(卷十、春雑歌)、ともにうるわしい白梅と、美女の

眉をおもわせる柳とを対比した詩情である。かくのごとく、雪や、鶯や、柳をそえることによって、季節の情趣がふかめられてある。

梅の花の散る光景を詠じたものには、

春の野に 霧たち渡り 降る雪と 人の見るまで

梅の花散る。(卷五、雑歌、田氏真人)

誰が園の 梅の花ぞも 久方の 清き月夜に

ここだ散りくる。(卷十、冬相聞)

などがあって、これらは叙景のものであるが、梅の花と人事とをからませた歌が、甚だ多い。たとえば

妹が家に 咲きたる花の 梅の花 実^みにしなりなば

かもかくもせむ。(卷三、譬喩歌、藤原八束)。

風まじり 雪は降るとも 実にならぬ 吾家の梅は

花に散すな。(卷八、春雑歌、大伴坂上郎女)

の二首は、ともに梅を女にたとえたのであって、前者は、いうことを聞いてくれたならば、いずれとも言うようにしようというのであり、後者の、まだ実にもならないわが家の梅を、花だけで散らすなというのは、わが家の娘をただ

ほんの言いかわしたただけで、やめられるな、というのであろう。

恋をうたったものには、

ひさかたの 月夜を清み 梅の花 心開けて

我が思へる君。

がある。(巻八、冬相聞、紀小鹿女郎)。梅の花の開いたように、わが心もあかるく開けて、思っている君よ、というのであって、月の夜男の来訪をよろこんだ歌であろう。

我が宿に 咲きたる梅を 月夜よみ 宵々見せむ
君をこそ待て。

というのは(巻十、冬相聞)、美しい月夜の梅をみせたく、毎晩君を待っているというのであろう。

梅の花 咲きて散りぬと 人は言へど わが標ゆひし
枝ならめやも。

というのは(巻三、雑歌、大伴駿河麻呂)、人の噂では、女が心変りをしたというけれども、それは、契りかわした我が女ではあるまいというのである。

吾妹子が 植ゑし梅の木 見るごとに 心むせつつ

古代人と花

涙し流る。

というのは(巻三、挽歌、大伴旅人)、いわゆる恋愛ではないけれども、亡妻をしのび、かなしむ情をのべたものである。

年のはに 梅は咲けども うつせみの 世の人あれし
春無かりけり。

というのは(巻十、春雑歌)、梅は年ごとに咲くけれども、世事にたずさわる自分には、のどかな春はないというのであって、こういう無常感らしい情懷をいだいた人もあったろうが、しかし

むつき立ち 春のきたらば かくしこそ
梅を折りつつ 楽しき終へめ(巻五、雑歌、大貳紀卿)。
春されば まづ咲く宿の 梅の花 一人見つつや
春日暮さん(同上、山上大夫)。

梅の花 今さかりなり 思ふどち かざしにしてな
いまさかりなり(同上、葛井大夫)
のごとく、多くの人は梅とともに楽んだのであって、しかも、そういう時には、

年のはに 春のきたらば かくしこそ 梅をかざして
たのしく飲まめ(巻五、雑歌、野氏宿奈麻呂)

酒杯に 梅の花うけて 思ふどち 飲みての後は 散

りぬともよし(巻八、冬相聞、大伴坂上郎女)

などのように、酒宴をともししたのであって、懐風藻の詩

句にも、『折_レ花梅苑側 酌_レ醴瑞瀾中』とか(調忌寸老人)、

『梅花董帶_レ身 琴酒開_ニ芳苑_ニ』とか(田辺史百枝)、『庭梅己

含_レ笑……琴樽宜_ニ此処_ニ』(大津連首)などの詩句がみられ

るが、いずれも侍宴の作である。

上述したように、梅は外来樹であったから、古くから人
民のなじんだ花ではなく、奈良時代ごろからさかんにみら
れるようになったけれども、山野の花ではなくて、庭園の
花であったから、その観賞者は多く貴族文人たちであっ
た。

七

ここに改めて、古代人の見た花について、総覧したい。

彼等の見た花の種類は、上述したように甚だ多く、しか

も、そのうちには、たとえば

苗代の 小水葱の花を 衣に摺り 別るるまにまに

何ぜか悲しけ。

のごとく(万葉集卷十四、東歌)、水田の雑草の花や、

梓弓 引津の辺なる 神馬藻の花 摘むまでに 逢は

ざらめやも 神馬藻の花。

のごとく(巻七、雑歌)、海藻や、或はまた

松の花 花数にしも わが背子が 思へらなくにも

とな咲きつつ。

のごとく(巻十七、平群女郎)、松のような、特殊な花をもつ
て恋情をうたっているのは、はなはだ面白い。尤もコナギ
は、少女をおもわせるような風姿であり、また濃紫色の花
が染料にもちいられる実用性があり、ナノリソは食用にさ
れ、その名称が『名告りそ』に通ずるから、人々に知られ
ていたであろうが、しかし松そのものは、いろいろに歌わ
れ、またその名称が『待つ』に通じて用いられたにしても、
花木として観賞されるものではないのに、その花がうたわ
れたのは、特異な例であって、こういうところに、古代人

の花に対する鋭い、こまやかな情愛をみることができるとにかく古代人は、

時ごとに いや珍しく 咲く花を 折りも折らずも

見らくしよしも。

とか(巻十九、大伴家持)、また

八千種に 草木を植ゑて 時ごとに 咲かむ花をし

見つつしぬばな。

のように(巻二十、大伴家持)、いたく花を愛したのであり、

また

花咲きて 実はならねども 長きけに 思ほゆるかも

山吹の花。

のように(巻十、春雑歌)、花に対して かぎりない親しみを

もったのである。

そうして、それらの歌には、

わが園の 李すももの花が 庭に散る はだれのいまだ

残りたるかも。

のように(巻十九、大伴家持)、単なる叙景のものもあるが、上述したように、いろいろ人事にからませた歌の多いのが

特色である。

春の園 紅匂ふ 桃の花 下照る道に

出で立つ少女。

は(巻十九、大伴家持)、庭の桃の花が紅に咲いて、その木かげまで明るく照っている道に、美しい少女が立っている光景を叙したものであって、単純な表現ながら、おのずからに、ほほえませせる歌である。また同じ作者の長歌に、

桃の花 紅色に 匂ひたる 面おもわのうちに 青柳の

細き眉根を 笑みまがり 朝影に見つつ 少女らが：

というのがあり(同上)、これは桃の花のような紅顔に、青柳のような細い眉毛をもった美少女を形容したものである。また

…… 胸むなわけの 広き我妹 腰細の 螺すがる嬴少女の

その顔の いくくしけさに 花のごと 笑みて立てれ

ば 玉たまはこ梓の 道行く人は 己が行く 道は行かずて

よばなくに 門にいたりぬ。……

は(巻九、雑歌)、上総すまの末すまの珠名たまなという少女をうたった歌であって、胸がひろく、シガ蜂のような腰の細い美しい姿

の少女で、その顔は愛らしく、咲いた花のように、にこにこと立っていると、道行く人は、じぶんの行くところに行かないで、呼びもしないのに、門にやってくる、というのである。

うるわしみ 我が思ふ君は 撫子が 花になぞへて

見れば飽かぬかも。

は(巻二十、大伴家持)、おそらく美女であろう恋人を、撫子になぞらえたのであって、いつまで見ても飽かないと言っているのである。

このように、美少女を花に喩えた古代人が、恋の比喩に花をもちいたのは、いうまでもない。

わが宿に 韓藍蒔き生ほし 枯れぬれど

懲りずてまたも 蒔かむとぞ思ふ。

は(巻三、山部赤人)、失恋したけれども、また恋をしようというのであり、韓藍は鶏頭、

妹が見し 棟の花は 散りぬべし 我が泣く涙 いま
だ于なくに。

は(巻五、山上憶良)、亡妻をしのんだものであり、棟は梅檀。

夏の野の 茂みに咲ける 姫百合の 知らえぬ恋は
苦しきものを。

は(巻八、夏相聞坂上女郎)、ひとり焦れている恋であり、

わが背子に わが恋らくは 奥山の 馬酔木の

花の 今盛りなり。

は(巻十、春相聞)、まさかりの恋であり、

かくあらば 如何ぞ植ゑけん 山吹の 止む時もなく

恋ふらく思へば。

は(巻十、春相聞)、やむ時もない恋心であるが、山吹を植えれば、何故に思いが増すのであろうか。

吾のみや かく恋すらむ 杜若 につらふ妹は

いかにかあらむ。

は(巻十、夏相聞)、相手の女心を問うのであり、

道の辺の 尾花がもとの 思草 今さらさらに

何か思はむ。

は(巻十、秋相聞)、いささか未練があるのであり、思草は
ナンバンギセル、

はた薄 穂に咲き出ぬ 恋を我がする かぎろひの

ただ一目のみ 見し人ゆゑに。

は(同上)、ひそかなる恋であり、

百に千に 人は言ふとも 月草の 移し心を 我がも

ためやも。

は(卷十二、寄物陳思)、つよい恋であり、月草は露草、

恋しけば 袖も振らむと 武蔵野の うけらが花の

色に出なゆめ。

は(卷十四、東歌)、つつしみ深い恋であり、うけらは、オ

ケラ。

女郎花 咲きたる野辺を 行きめぐり 君を思ひ出

たもとほり来ぬ。

は(卷十七、大伴池主)、やさしい恋であり、

紫陽花の 八重咲く如く やつ世にも いませ我背子

見つしぬばな。

は(卷二十、橘諸兄)、つよい恋であって、このように、さま

ざまな思慕、恋情を、いろいろの花によせて歌っている。

仁徳天皇の皇后の歌に、

……… その下に 生立てる 葉広 五百箇真椿

古代人と花

しが花の 照りいまし しが葉の 広りいますは
大君ろかも。

というのがあり(古事記下巻)、また雄略天皇の皇后の歌にも、ほぼこれと同じ文句がある(同上)。天皇の姿は、椿の花のように照りいまし、その葉のように、広く、ゆたかにいます、というのであって、その葉が緑でひろく、その花が紅に輝くさまが、女性から見て、好ましい男性の雄々しい姿を、おもわせたのであろう。

また花は、なつかしい古里を思わせる。

藤浪の 花はさかりに なりにけり 奈良の都を

思ほすや君。

は(卷三、大伴四繩)、作者が大宰府長官の大伴旅人にささげた歌であるが、うるわしい藤の花を見て、遠い赴任地の九州から奈良の都をしのぶ望郷の念は、作者自身が先ず感じたにちがいない。

橘の 下吹く風の かぐはしき 筑波の山を 恋ひず
あらめかも。

は(卷二十、占部広方)、防人として遠く旅に出た東国の人が、なつかしい故国の山を思いうかべたのである。

ふふめりし 花の初に 来し我や 散りなむ後に
都へゆかむ。

のごときも(卷二十、大伴家持)、何げない思いのようであるが、地方に赴任した官吏の都に対する望郷の念が、ひそめられてある。

また古代人は、花をいろいろの飾りにもちいた。

秋萩は 盛過ぐるを 徒らに かざしに挿さず
還りなむとや。

とか(卷八、沙弥尼)、

郭公 来鳴く 五月の 菖蒲草 花橋に貫きまじへ
鬢にせよと 包みて遣らむ。

などのように(卷十八、大伴家持)、花を頭髮の飾となし、或は

燕子花 衣にすりつけ 丈夫の きそひ狩する
月は来にけり。

のように(卷十七、大伴家持)、花を衣にすりつけて美しくするなど、自然の花をそのまま観賞するのみならず、いろいろ実用に利用した。

以上長々と、花に対する古代人の感懐をのべてきたが、最後に一言申したい。

春の野に 莖つみにと 来し我ぞ 野をなつかしみ
一夜寝にける。

のように(卷八、春雜歌、山部赤人)、野草の咲いている春の野に来て、そのなつかしさに帰ることを忘れ、一夜を野で明かすなどは、この上もない風雅のきわみと言ってよく、このように、古代人は花を愛し、花に親んだのである。そうしてこれは、彼等の自然に対するおのずからな態度であった。彼等は自然にさからい、それと争い、戦うようなことせず、あくまで自然と融和して、その美を玩味したのである。